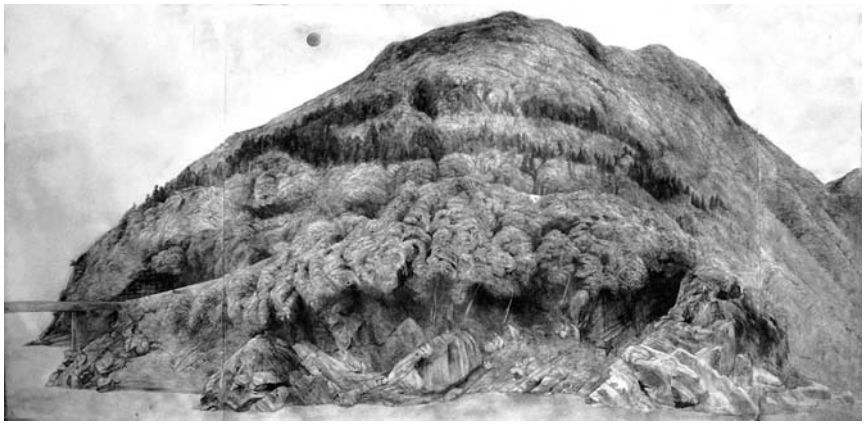
《蛇巻岩》
日本画における風景表現の追求

《Jyamaki-Iwa》
On Pursuit of the Expression of Landscape by Japanese Painting

稲葉　未来
Miki INABA

崇城大学大学院芸術研究科美術専攻
Division of Fine Art, Graduate School of Art, Sojo University

《蛇巻岩》 1800×3600（mm）　麻紙　岩絵の具



《蛇巻岩》　写生　525×1750（mm）　画用紙　鉛筆　透明水彩

修了制作では、私たちにとって身近な自然にスポットをあて、自然から感じられる「圧倒的な存在感」を描くことにより、自然の雄大さや美しさ、恐ろしさを表現することを目的とした。「圧倒的な」という視点から、描く対象を風景画に絞り、その中でも多くの人が一度は目にしたことがあり、一般的に自然のイメージとも結びつきやすい山を題材とした。

制作論では、私がスケッチを行う中で自然から感じた「圧倒的な存在感」について考察した。「存在感」という曖昧なものを私がどこから感じたのかを分析し、それらを基に構図と色彩をもって画面に構成していった。その際に、日本画の絵の具の特性である岩絵の具を重ねることにより生み出される密度にも着目した。私には、ものを描写することにより密度を高め、それらは存在感へと結びつくものと思われた。そこで、私は、日本画の特殊な画材を使用し、筆の種類や絵の具の粒子の粗さによる表現の違いを検証し、風景画の中の素材を５種類に分けた後、それぞれの素材に適した表現方法を模索した。

第１章では、日本画を６年間制作してきた中での描く対象の変化を、自己の心情の変化を中心に、描く目的を２種類に分けた上で分析した。まず、表現したい想いを描いた絵画から写生を基本としたものへと移り変わった経緯を追った後、制作論の目的を記した。

第２章では、風景画の中でも山という題材を選んだ理由や、題材とする山を見た時の第一印象と山の形態を、情景を含めて具体的に挙げ、山のどこに魅かれたのかを分析した。

第３章は３項目に分け、第１、第２項目では本画制作前のプロセスとして写生、小下図を取り上げ、第１項目では、写生を行うなかで、どのように山を描いていくのか、また描く上で何を重視するのかといった、作品の方向性を決定したことについて述べ、第２項目では日本画を制作する中でも重要な小下図を取り入れなかった理由を、小下図の役割を見つめ直した上で再度検討した。第３項目では本画制作における対象（素材）別の描画材料に着目し、描画プロセスを検討した。まず、絵の中の素材を木、岩、土、空、水の五つに分類し、素材の持つ形態の特徴、色彩、硬度などをそれぞれ分析し、どのような筆を使い、どのような粗さの絵の具で描くことで“そのものらしさ”が表現出来るのかを検討した。

第４章では、素材を重視し制作することによって生じた利点と欠点について述べ、また、風景画を描く上で重視すべきものが何であるのかについて検討した。